

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.11〉

〈西岐波④ 散策マップ〉

江戸時代の西岐波は、周防国白松庄岐波村と呼ばれていた。床波には、村を収めていた福原公が住吉神社を参拝するために通った道筋があり、現在も「お駕籠道（かごみち）」の名称で親しまれている。かつての商店街の面影が残る約1・6キロのコースを西岐波郷土史研究会の和田宏司会長（82）と歩いた。



福原公ゆかりの「お駕籠道」たどる

狭い路地にちりばめられた歴史の面影



出発地点の市民センター(①)は、西岐波小の前身である錦波尋常小があった場所。裏側の階段に立つ2本の石柱は当時の門で、移設後は村役場が1943年まで機能していた。すぐそばの三差路(②)の角には、右側に「宇部」と「新川」、左側に「床波」と刻まれた石造りの道しるべが残る。お駕籠道を指している南へ進むと、

大番社(③)と呼ばれる小さな石室のほころに着く。990年に創建された神社で、瓊々杵尊(にぎみのみこと)と、きさきの木花之開耶姫(このはなのさくやひめ)が祭られている。道なりに進み、細い道(④)を過ぎると、萩藩からのお触れを書いた札を掛ける高札場(⑤)があった。村人への情報を得るためここに集まっていたという。十字路を直進すると、左右に白塗りの塀。左側は1668年に創業し「瀧乃花なみのはな」で知られた三井酒造場(⑥)、隣は1877年に「床の梅」を売り出した三井酢造場(⑦)だ。右側は村長を務めた本加藤家(⑧)で、幕末の63年に公武合体派によつ

て京都を追われた七卿のうち、東久世通禧(ひがしくげみちとみ)と錦小路頼徳(にしきのこうじ)よりのりが訪れ、道を隔てた西側の加藤家(⑨)に宿泊したと伝わる。西光寺(⑩)門前の坂を西へ下り少し行くと住吉神社(⑪)写真に到着。751年に住吉三神を祭つた西岐波最古の社で、子どもを抱いたこま犬が鎮座している。荒人神社、嵐堂の名称でも親しまれている。周辺は江戸時代から塩田があり、その一部は1888年ごろまで

続いていったという。ここまでがお駕籠道だ。同神社の裏から沢波川沿いを北へ歩くと権代南向き地蔵として親しまれる延命地蔵菩薩(⑫)がある。室町時代の河口は、潮の干満が激しく事故が多発していた上、水質の悪い湿地帯で疫病も流行していた。旅で通りかかった僧が鎮魂と地元民の安全を祈願して建立したという。1914年に架けられた石の権代橋(⑬)は98年に河川改修のために取り壊し、石材の一部を使つたモニュメントが残る。

道幅の狭い路地に歴史の面影がちりばめられ、タイムスリップしたかのようだった。道中、沢波川を見下ろせる場所があった。福原公もこの景色を好んで通っていたのかもしれない。

次回は万倉地区。11月8日スタート。